

# Poetics of Young People's Frustration in James Joyce's *Dubliners*

ジェームス・ジョイス『ダブリナーズ』  
における若者の挫折の詩学

# CONTENTS

- 1, 作品・作者について
- 2, 卒論の内容と主張
- 3, 各章の紹介
- 4, まとめ
- 5, Works Cited

# 1, 作品・作者について

①作品について：

James Joyce's *Dubliners*

ダブリンという都市を舞台にし、そこで暮らす人々の様子を描いた15篇からなる短編集。最初の3篇は「少年期」、続く4篇は「思春期」、次の4篇は「成熟期」、次の3篇は「社会生活」と分類され、最後の1篇「死者たち(*The Dead*)」で構成されている。

# 1, 作品・作者について



②作者：ジェームス・ジョイス (James Joyce)

- 1882年、アイルランドのダブリンに生まれる
  - 1904年、ダブリンを去り、トリエステへ移る。
  - 1914年、*Dubliners*を出版。第一次世界大戦をきっかけにスイスへ移住。
  - 1940年、第二次世界大戦の難を避けて、チューリッヒへたどり着く。
  - 1941年、腹膜炎のため58歳で死去。
- ★二度の戦争を経験し、大陸を移り住む人生であった。

## 2, 内容と主張

タイトル:

Poetics of Young People's Frustration in James Joyce's *Dubliners*

ジェームス・ジョイス『ダブリナーズ』における若者の挫折の詩学

内容:

「暗い結末の話が多いDublinersであるが、悲劇の中にわずかな希望も隠されていることによってこの短編集が奥深くなり、読者に愛される理由となっている。」という主張のもと、特に子供や若者が視点人物となっている話において希望がより強く表現されていることの考察。よって、全15篇の中でも、w子供や若者が主人公となっている「出会い(An Encounter)」と「アラビー(Araby)」、そして「エヴリン(Eveline)」の3篇に注目している。

# 3, 各章の紹介

**第一章** : Reconsideration of the Relationship between the Boy Narrator and the Strange Man

主人公と奇妙な男の関係性の再考

**あらすじ** : 主人公の僕は退屈な学校生活を抜け出して、ピジョンハウスを目指す冒険へと出る。しかし、僕は途中で疲れ切ってしまい、16時の門限もあったため、冒険の目標は達成されずに終わってしまう。冒険を中止した僕が土手で休んでいると、奇妙な男が近づいてきた。男は少女の髪や肌の素晴らしさ、乱暴な少年を鞭打つ意義などを話し始める。僕は男の奇妙さに恐怖を抱き、あわててその場を立ち去った。

**Marilyn, Frenchの主張** : 僕は学校生活で既にサディズムを経験しており、男と出会ったことでそれがさらに拡大した。

**私の主張** : 僕は学校でのサディズム(友人との喧嘩や教師からの叱責)に対して感情的な意見を発することはなく、ただ傍観者となっている。一方で、奇妙な男に対しては、hear is beating quickly や with fear という言葉から明確に恐怖の感情を抱いていることが分かる。つまり、僕が学校で経験したサディズムと、男から感じたサディズムには明らかに程度の差があり、男との出会いによって学校でのサディズムが拡大されたのではなく、全く新しいサディズムに出会ったという方が正確である。これは、僕にとって新しい感情の気づき・学びといえ、夢見ていた冒険が恐怖で終わったという悲しい結末だけでなく、成長の側面もあったと考える。

# 3, 各章の紹介

**第二章** : Mangan's sister's consolation in the boy narrator's frustration

主人公の葛藤の中にある、マンガンの姉にとっての救い

**あらすじ** : 主人公の僕は近所に住むマンガンの姉に淡い恋心を抱いている。近くでArabyと呼ばれるバザーがあることを知った僕は、マンガンの姉に何か買ってくることを約束する。しかし、叔父の帰宅が遅かったこと出発が遅れ、Arabyへ到着したころにはほとんどのお店が閉まっていた。僕は何も買えないまま、自分が虚栄心に駆られた生き物のような気分になり、惨めさと怒りに震えて空を見上げるのだった。

**Mandel, Jeromeの主張** : この失敗は僕にとって自分自身を客観視できるようになる良い機会であった。**私の主張** : 先行研究の意見に同意し、それだけでなく、マンガンの姉にとってもメリットがあった。僕はArabyへ行く前にマンガンの姉と話したことは無く、いつも陰から見つめたり、後ろをついて歩いたりするだけであった。にも関わらず僕は彼女に対して恋心を抱いており、僕が非常に盲目的であることが読み取れる。よって、結末で僕が自分自身のことを客観視できるようになったということは、以前の盲目的態度が改善される可能性へと繋がり、マンガンの姉にとっても利点である。また、Arabyの会場では二人組の男が店員の女性を誘うような描写があり、マンガンの姉がArabyに行けなかったことは、結果的にマンガンの姉を不埒な男たちから守る結果となっている。よって、僕の計画が失敗に終わったことのなかには、好都合なことも含まれているといえる。

•

# 3, 各章の紹介

## 第三章 : A Successful Aspect of the Ending in “Eveline” Considering Eveline’s Independence and Rationality

エヴリンの自立や理性的な面から考える、『エヴリン』の成功的側面

**あらすじ** : エヴリンはアイルランドで父親と二人の弟と主に暮らしていた。しかし、父親は母親が死んでから子供たちに暴力を振るうようになり、働きながら家事もこなすエヴリンの生活は厳しいものだった。そこでエヴリンは彼氏のフランクとブレノスアイレスで新生活を始めることを決意する。しかし、ブレノスアイレス行きの船に乗る直前になって幼い頃の幸せな家族の思い出や、生前の母と交わした約束などを思い出してしまう。また、自分がいなくなった後の老いた父親の生活を不安に思うこともあり、エヴリンはフランクとの駆け落ちを急遽取りやめてしまうのだった。

**Marilyn, Frenchの主張** : 自由を欲しているエヴリンであるが、十分な意思や自分の考えは持っていない。

**私の主張** : エヴリンが自由が欲しいと思い始めたきっかけは、母親が送った惨めな人生の二の舞にはなりたくないという思いや、自分を父親の暴力から守ってくれる人を求めていたことであり、自己本位的な理由であることは明白であり、彼女の自由に対する意思は固かったといえる。駆け落ちを止めた理由に関しては、幼少期の思い出や母との約束のような外的要因によってエヴリンは他者からの意見に振り回されてしまったような印象を受けるが、父親がフランクに対して発した苦言を考慮に入れて判断しており、盲目的にフランクのことを信じているわけではない。自由を求める理由がエヴリン自身に関わることであることと、父親の意見を受け入れて判断していることを考えると、エヴリンはフランクとの駆け落ちに夢中になっておらず、フランクを都合のいい手段として捉えていることが分かる。エヴリンは冷静で理性的であると読むと、フランクという不確実な手段を避けることができたというハッピーエンドとも読める。

# 4, まとめ

## 第一章：

僕が目的地まで辿り着けず、変質者に遭遇して終わる。

⇒変質者との出会いによってサディズムを知る(学び)。

## 第二章：

僕がArabyで何も買えずに惨めな思いをして終わる。

⇒自分自身を客観視するきっかけであり、マンガンの姉にも良い影響を与えると考えられる。

## 第三章：

フランクとの駆け落ちが無くなり、現状を変えられない

⇒エヴリンの冷静で、判断力のある性格が読み取れる。

# 5 , Works Cited

- Ehrlich, Heyward. “‘Araby’ in Context: The ‘Splendid Bazaar,’ Irish Orientalism, and James Clarence Mangan.” *Dubliners*, by James Joyce, edited by Margot Norris, with introduction by Hans Walter Gabler, Norton Critical Editions, W. W. Norton, 2006, pp. 283-98. Originally published in *James Joyce Quarterly*. Winter and Spring, 1998.
- Joyce, James. *Dubliners*. 1914. Edited with an introduction and notes by Terence Brown, Centennial Edition, Penguin Books, 1993.
- ---. “To Grant Richards.” 5 May. 1906. *Letters of James Joyce*, by Joyce, edited by Richard Ellmann, vol. 2, Faber and Faber, 1966, pp. 132-35.
- Mandel, Jerome. “The Structure of ‘Araby’.” *Modern Language Studies*, vol. 15, no. 4, 1985, pp. 48-54.
- Marilyn, French. “Missing Pieces in Joyce’s *Dubliners*” *Twentieth Century Literature*, Duke UP, 1978, pp. 443-472.
- Norris, Margot. “The Perils of ‘Eveline’.” *Dubliners*, by James Joyce, edited by Margot Norris, with introduction by Hans Walter Gabler, Norton Critical Editions, W. W. Norton, 2006, pp. 283-98. Originally published in *Suspicious Readings of Joyce’s Dubliners*. U of Pennsylvania P, 2003.